S20211

環境規制に関するポーター仮説の性質と境界線 —イノベーションを促進するのは規制か規制緩和か?—

Characteristics and Boundary of environmental regulations on Porter's hypothesis: Which is better for innovation, regulation or deregulation?

○正 長内 厚^{*1}Atsushi OSANAI, Ph. D.^{*1}^{*1} 早稲田大学 Waseda University**Key Words** : Porter's hypothesis of environmental regulation, Deregulation, Innovation management

1. はじめに

ある種の環境規制は、製品開発の指標を示すことで、メーカー間の互恵的な競争を誘発し、イノベーションを促進する可能性がある。これを環境規制に関するポーター仮説という。ポーター仮説については、企業の製品開発成果の定量研究によって一般化が試みられてきた（例えば、有村・杉野, 2013）。また、環境規制とイノベーションの関係性については、メーカー間の環境技術の標準化プロセスを明らかにする中原・相山（2018）などの研究によって、そのメカニズムが定性的に示されている。また、阿部・長内（2019）では、規制がイノベーションを促進するのは環境規制にとどまらず、その規制が製品開発の指標を指し示すような場合には、やはり規制がイノベーションを促進する一面があることを示した。しかしながら、これらの研究では、どのような条件の下では規制がイノベーションを促進し、一方でどのようなときに規制緩和がイノベーションを促進するのか、言わば、イノベーションの促進要件としての規制と規制緩和の境界線の議論は未だに検討されていない。

2. 規制か規制緩和か

そこで、本研究では、イノベーションを促進する規制と規制緩和のメカニズムの違いをいくつかの事例の検討による定性研究によって探索的に示すことを試みる。ここでは紙幅の都合により事例研究の詳細は割愛するが、ポイントとなるのは、不確実性への対応の違いにあると考えられる。

ポーター仮説が想定するような状況では、規制が明確な開発ターゲットを示すことによって、開発目標を設定する製品コンセプトの不確実性を低減し、企業が何を開発すれば、市場で評価される製品開発となるかが明らかになり、効率的な資源動員とその結果の技術開発成果が享受できる。阿部・長内（2019）は、ポーター仮説が想定するような、開発ターゲットを示すような規制ではないが、規制が開発オプションを限定し、開発組織があえて難易度の高い開発を行わざるを得ない状況を作ることによって、言わば追い込まれてイノベーションが実現する状況を呈しており、開発オプションが減少することで結果的に製品コンセプトの不確実性低減に寄与しているところは共通している。

一方、規制緩和が実現するのは、多様な開発パターンの出現の助長である。規制緩和は製品コンセプトの絞り込みとは反対に、様々なアイデアを容認し、数多くのトライアンドエラーを促すことができる。これは、技術や市場が極めてタービュラントな状況において、そもそも開発の選択肢が来てできないほど不確実性が高い場合、すなわち状況が不確定な場合に、ターゲットを設定せず、幅広い開発オプションを持つことで、どれか「当たり」が見つかるかもしれない状況を生み出している。

文 献

- (1) 阿部靖史・長内厚 (2019) 「イノベーションの促進要件としての「制約」—日本の F2 戦闘機における炭素繊維機体開発事例—」『早稲田国際経営研究』No. 50, pp. 63-94.
- (2) 有村俊秀・杉野誠 (2013) 「環境規制の技術革新への影響：企業レベル環境関連研究開発支出データによるポーター仮説の検証」、研究・イノベーション学会『研究 技術 計画』第 23 巻、第 3 号。
- (3) 中原久美子・相山泰生 (2018) 「コンセンサス形成プロセスで導かれる利潤獲得可能性—家庭用エアコンにおける新冷媒の標準形成過程—」『経済論叢』 Vol. 192, No. 1, pp. 125-149.
- (4) Porter, M.E. (1991). America's Green Strategy. *Scientific American*, 264, 168.